

第二の古里 島親と絆

広島叡智学園 初の卒業生

地域に根差した心

昨年11月下旬、広島叡智学園（大崎上島町大串）の近くにある建設業大森公司さん（74）方を訪ね、餅やギョーザを一緒に作って交流した。海外への進学について熱く語りながら「同窓会は島でやりたいね」と笑い合う姿に、大森さんは「みんなが歩いた道は次に残る。今の気持ちを持ち続けて」とエールを送った。

認定
東広島
公道自動車学校
日 毎
校 校
受 入
付 校
082-425-1110

大森さんは、大崎上島町内での生徒の見守り役「島親」の一人だ。島親には大串地区などの約50世帯が登録。生徒の希望に基づき、町外出身者を対象に原則マンツーマンで担当する。広島を含む29都道府県から集い、寮



大森さん（右端）とギョーザを作って交流する生徒

生活を送る生徒をサポートし、週末に交流会を開いたり、相談相手になったりしている。

孫のような存在

大森さんが担当する小林真子さん（18）は海外で過ごした後、入学した。

「楽しい経験をたくさんさせてもらった」と感謝する。一方の大森さんも、バターゴルフ場の整備を手伝ってもらうなど「孫のような、友人のような存在」と歓迎する。高齢化率が5割に迫る地域に

とって、生徒は支えであり、明かりをともし存在だという。

同校は、世界とともに地域の「より良い未来」を創造できるリーダーの育成を目標とする。高校3年生も入学以来、授業などで住民や地元事業者と連携し、少子高齢化にあえぐ地域の課題解決を図ってきた。

魅力 英文で発信

静岡県出身のロビンズ海さん（18）はインド出身の同級生と協力し、ホテ

ル清風館（沖浦）のホームページに島の魅力を伝える英文の記事を掲載。「このすてきな島を多くの人に知ってもらいたい」と訪日客をターゲットに企画し、木江の町並みや神峰山などのスポットを取り上げた。同館の吉野秀雄営業部長（44）は「外国の方に興味を持ってもらえた」と喜ぶ。後輩の高校2年生4人が活動を受け継いでいる。

産品作りで地域を応援する生徒も。黒木碧恵さん（18）は、地元の農家やカキ養殖業者と連携し、無農薬レモンの葉を使った塩の商品を開発。竹原市のたけはら海の駅で販売し、ファンを増やしている。

首相の諮問機関で、子ども関連の問題を話し合う「こども家庭審議会」の専門委員も務める黒木さん。同町のような過疎地域を活気づけるのは子どもや若者の社会参画だと考え、大学での研究テーマにするという。「島は第二の古里で心よりどこへ。経験を積んでいつか帰ってきたい」と誓う。

福岡一彦校長は「都会や海外に出ても広島に愛を持ってくれるはず。スケールの大きな発想力で物事を考える生徒たちが島に刺激を与えるかもしれない」と期待する。

（渡部公揮）